

ヘブル1章1～4節「御子にあって語られた」

アドヴェントのとき、主イエスのすばらしさを改めて心に留めたいと思います。

1. 神は語られた（：1～2a）

今日はヘブル人への手紙の冒頭部分を開きました。この書の最後の部分には挨拶が記されていて、手紙として書かれているのは確かです。しかし、差出人についても受取人についても明記されていないので、断定することはできません。旧約聖書からの引用が多くあります。この書を読み進めていくと、祭司のことが丁寧に取り上げられています。そのようなことから分かるように、手紙の受取人は、旧約聖書をよく知っている人たち、ユダヤを中心とした初期の教会の兄姉です。その人たちにイエス・キリストのすばらしさを教えようとしています。それは、彼らがよく知っている旧約の律法に戻ってしまう状況があったのではないかということです。

1～2a節。「神は…語られました」。神は人に語りかけるお方です。神が語られたゆえに、人は神のことを知ることができ、神が教えてくださる多くのことを知ることができます。聖書の時代だけでなく、今も神は私たちにも語りかけてくださいます。私たちの分かることばでご自身のことや真理を教えてくださいます。

神が語られたことについて、ここで四つの対比によって説明されています。神は「昔、預言者たちによって、先祖たちに」語られましたが、「この終わりの時には、御子にあって私たちに」語られました。すなわち、旧約時代と新約時代を対比しています。

「昔」と「この終わりの時には」、「預言者たちによって」と「御子にあって」、「先祖たちに」と「私たちに」と三つの対比の他に、もう一つの対比が示されています。旧約時代には神は「多くの部分に分け、多くの方法で」語られましたが、新約時代には「御子にあって」、御子だけを通して、語られたのです。すべて御子に集約され、御子において成就したのです。神は御子において最終的に、完全に語られたのです。それゆえに、新約聖書が書かれた時点で神の啓示は完結したのです。

御子にあって神の啓示が完結したことは、ここで「昔」に対比して今を「この終わりの時」と呼んでいることにも表れています。長い間の旧約の備えがあり、御子が来られて、完全な救いのみわざを成し遂げてくださいました。旧約の古い契約は使命を終え、新約の新しい契約が始まっています。この新しい契約が世の終わりまで有効で、永遠に続きます。ですから、御子にあって神が語ることは終末的なことなのです。

今も、私たちも神の語りかけを聞くには、御子を信じ、御子に結ばれていることが必要です。御子から離れて、神の御声を聞くことはできません。ヘブル人の教会も御子の福音が語られ、建て上げされました。ところが、「御子にあって」語されることよりも、旧約聖書のことばやユダヤ人の伝統に戻ろうとする誘惑があったのでしょうか。

私たちも聖書の教えよりも、救われる以前からの慣れ親しんだ考え方やこの世で注目される考え方へ傾いてしまうなら、信仰が後退し、崩れてしまうでしょう。神が御子イエス・キリストにあって成し遂げてくださった救いを感謝し、御子にあって神が語られていることに堅く立っていることが大切です。

2. 御子による啓示の卓越性（：2b～4）

その御子にあって神が語られること、御子にあって神がなさった御業が、他にはないすばらしいものであるということを、著者はことばを重ねて語っています。ここに七つのことで語っています。

第一に、「神は御子を万物の相続者と定め」たことです。神は「万物」を造られ、保持しておられます。この世界、宇宙のすべては神のもの、神の所有です。そして、その神が持つておられる「万物」を御子が受け継ぐことに定めました。神が造られた世界のすべて、また、神がなさる御業のすべてを御子が相続します。御子は神と同じ権威を持ち、能力を持つのです。

神はイスラエルの子孫として御子を遣わし、御子によってすべての人に救いを用意されました。そして、御子を信じる者を神の民に加え、神の所有とされました。教会は神の所有の民です。私たちになされた神の御業も、御業のゆえに救われた私たち自身も御子のものなのです。

第二に、神は「御子によって世界を造られ」たことです。神は何もないところからことばによって一つ一つ

のものを造られました。ヨハネの福音書の冒頭に「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。…すべてのものは、この方によって造られた」とある「ことば」なる方こそ神の御子イエスであるとヨハネは証言しています。

第三に、「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れ」です。旧約聖書において「神の栄光」は神を礼拝するところで現されました。そのとき、人々は神を恐れ、ひれ伏し、礼拝しました。その神の栄光が御子において輝いています。これは御子イエスにおいて人々が神を礼拝するところで神の栄光が現されるということです。

また、御子は「神の本質の完全な現れ」です。主イエスは神の本質を完全に持っておられ、表されました。御子イエスは罪のないきよい生涯を歩まれ、すべての人の罪を代わりに負って十字架で死なれ、死にも勝利してよみがえり、天に昇り、神の右に着座されました。そのすべてにおいて神の本質、神の御性質が現されています。御子を見るときに目に見えない神を見る能够性ができます。

第四に、御子は「その力あるみことばによって万物を保っておられ」ことです。福音書には、嵐を静めたり、病気を癒したりした主イエスの奇蹟が数多く記されています。自然界も主イエスのことばに従います。主イエスは自然界に働きかけることができ、人のからだにも力を發揮することができます。御子イエスは創造者であり、この世界を保っておられるからです。また、「万物」には神の民、教会も含まれています。私たちもみことばによって教えられ、戒められ、矯正され、信仰の歩みを保たれています。

そのように世界を造られ、保っておられ、正しく導かれる御子に信頼しているので、私たちはどのような中にあっても御子を通して神に祈ることができます。

第五に、「御子は罪のきよめを成し遂げ」たことです。旧約時代には、罪をきよめることは大祭司の働きでした。年に一度、定められたいけにえの血を携えて聖所に入り、罪のきよめを行いました。御子イエスは、いけにえの血ではなく、十字架上で流されたご自身の血をもって、人々の罪のきよめを成し遂げてくださいました。大祭司は毎年、いけにえの血によってきよめを行いましたが、主イエスはたった一度だけ、ご自身を獻げ、完全な贖いをなし、その贖いによって、私たちのすべての罪をきよめてくださいました。そして、私たちが神のもの、御子のものとしてふさわしくなるようにしてくださいました。

第六に、御子は「いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました」。「自らを低くして…十字架の死にまで従われました。それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました」。罪のきよめを成し遂げられて、よみがえり、天に昇り、神の右に座しておられます。

「神の右」ということばには注意が必要です。ここでの「右」とは比喩的な意味です。聖書では通常、人は右利きで、右手が力を象徴します。そのように「右の座」は権能を表します。右の座に着かれたとは、「大いなる方」、神の権能がすべて御子に委ねられたという意味です。御子は今、「いと高き所」、天において神の全権を委ねられているのです。

以上のように、著者はことばを重ね、御子の御業を一つ一つ挙げて、御子のすばらしさを語っています。そして最後に第七として、御使いと比べて、御使いよりもすぐれた方であると言います。

4節。手紙の受取人の中には、主イエスは御使いのようだと言う人がいたのかもしれません。そして、救われるためにはイエス・キリストを信じる他に必要なことがあるという教えに心が揺らいでいたのでしょうか。

それに対して著者は、主イエスが神の御子であること、御子と御使いは全く違う存在であることを強調したのです。

御子イエス・キリストに改めて心を向けましょう。御子のすばらしさを賛美しましょう。御子による救いを感謝しましょう。